

巻頭文

「分かるはず」の勘違い

藤沢市文化団体連合会会長 長田華鳳

平成が今年の五月から新年号に代わるが、この三十年間は昨

年の漢字に「災」が選ばれたように、北海道から九州に至る広い地域が多くの自然災害に見舞われた感があります。被害を受けられた皆様方には一日でも早く元の生活に戻るよう心からご祈念申し上げますとともに、「災いは忘れたころにやってくる」というように、いつ何処でも災害に対処できる町づくりと

各人の心づもりは大切だと改めて思います。

さて、今年は亥年ですが、亥年生まれの上の人物と云いますと、藤沢ゆかりの方では、名誉市民の片山哲氏が挙げられます。しかし、忘れてならないのは昨年の大河ドラマの主人公「せごどん」西郷隆盛です。彼は一八二七年十二月七日生まれと言われていますが、伝えられる彼の性格は、あの大河ドラマそのものと鹿児島では評価されているようです。亥年生まれの人々の性格というのは、「正義感が強く、心優しい」「困っている人を見ると、放っておけなくなり、厄介ごととわかっても首を突っ込んでしまう」とありました。これは、正にテレビの「せごどん」そのもののような感じがします。彼が明治政府を追われたのは、大久保利通との確執が原因のようですが、この二人がもつ腹を割って話をするのができていたなら、違う局面を迎えたかもしれませぬ。言葉と感情のバランスの難

しさてしょうか。

ところで、言葉って何でしょう？

もちろん、意思伝達の手段にほかなりませんが、「言の葉」「言霊」という表現こそ言葉の本質を表していると思います。では、学生時代に日本の学校で言葉の伝え方というのを習った経験はありますか？ここに伝達法としてコミュニケーション学というものがありません。これは意思伝達には不可欠の基礎学問ですが、なぜか日本ではさほど重要視されていません。その原因は、日本には、心が通い合っている関係があれば、「以心伝心」が当たり前というところでもない不文律が存在するからです。

コミュニケーション学は決して難しいものではありません。その基本概念は単純で、相手を理解できなかったり、伝わらなかった言葉は、言葉を発した人に責任があるというものです。しかし、日本では相手の言ったことが理解できないのは聞いた側の責任ということになってしまふのが一般的です。もちろん、言わずにおきながら、分かるはずということは論外です。

日本の文化度の高さは、江戸時代の有名な医師シーボルトも認めているのですが、この様に言葉に対して無頓着な日本人、

言葉を大切にしない国の文化度って本当に高いと言えるのでしょうか、少し不安になります。

私は、相手を論破するディベート文化を肯定するつもりはありません。相手を思いやる心をこめた言葉、大切な人だからこそ言葉を慎重に選ぶ習慣。これらが身につけてこそ、日本が発信する「おもてなし」の文化が生きてくるように思います。お互いが相手を大切に思い、心手を通い合わせることができれば、心ではないでしょうか。

かの西郷さんも、「大久保なら分かってくれる。」大久保さんも、「西郷さんなら分かってくれる。」という幻想さえ抱かなくなったら、世界は変わっていかたかもしれません。

オリンピックを控え、藤沢にも多くの外国人が来るでしょう。英語ができるかどうかは二の次にして、藤沢市民の一人ひとりが心通い合う接し方ができれば、文化都市としての面目躍如となるでしょう。

私の今年の目標は、できる限り「こ・そ・あ・ど」言葉に頼らない話をする事。そして、相手の立場に立って、その言葉に耳を傾けてしっかりと聞くようにすることにしようと思ひます。



大久保利通

西郷隆盛

郷土愛あふれる藤沢の誇れる伝統文化



このたびは、「藤沢文化」

五十五号発行、誠におめでとうございませす。また、藤沢市文化団体連合会の皆様には、永きにわたり様々な催しでのご活躍、また本市の文化振興に多大なるご尽力をいただいておりますことと対しまして、あらためまして心より感謝申し上げます。

華道や茶道、謡曲、日本舞踊などの伝統芸能や芸術活動を先人から受け継ぎ、伝統文化の継承を大切にされている皆様におかれましては、それぞれの伝統を未来へ繋げる積極的な活動を継続していただいておりますことと、深く敬意を表します。

さて、いよいよ来年に迫りました東京二〇二〇オリンピック競技大会。本市は、セーリング競技の会場市であることを、伝統芸術や歴史文化を国内外に発信していく好機ととらえております。

本市には、長い年月をかけて多くの市民と行政が、ともに手を携えて築いてきた文化芸術の歴史があります。人と人との

藤沢市長 鈴木恒夫

「和」を大切に文化プログラムによる事業を展開すること、一期一会での心のこもった藤沢らしいおもてなしができるものと期待しております。そして、東京二〇二〇大会を

契機に創造される新たな文化芸術を、オリンピックレガシーとして次世代へ継いで行くためにも、藤沢市文化団体連合会の皆様のお力添えを欠くことはできません。今後とも何卒よろしくお願い申し上げます。最後に、藤沢市文化団体連合会のみならずのご発展と、会員皆様のご健勝とご活躍を祈念し、ご挨拶とさせていただきます。

「文化がつなぐ 人の和」

藤沢市教育委員会 教育長 平岩多恵子



藤沢市文化団体連合会のみなさまには、

市歌にありますように「みなぎるは 文化の光 輝きにほふわが藤沢市」を築くために、お力を貸していただいておりますことと、心から感謝申し上げます。また、毎年三月には、「ワクワク体験広場」を開催していただき、多くの子どもたちが、実際に文化と触れあうことのできる体験の場をつくってくださっていることに、お礼を申し上げます。今までに触れたこともない大

きな筆で紙いっばいに文字を書く「毛筆大書」、また、日本古来からの楽器である「箏」「尺八」「琵琶」「三味線」などに触れての演

みらいの未来

公益財団法人 藤沢市みらい創造財団理事長 石井恒男



昨年、藤沢市は長年の懸案であった

市民会館の再整備について建替える方向で行うという考え方を明確にしました。その少し前に隣接する南市民図書館が老朽化やバリアフリー等への対応として駅前的小田急百貨店の中へ暫定的な移設を行うことも決まりました。

市民会館周辺は地区計画において奥田公園等と文化施設が一体となったゆとりある空間として生活、文化機能の集積が図られる地区となっており、今後そうした拠点としての再編整備が図られるものと期待が膨らんできます。

一方、この再編整備は市民会館のホール施設などを中心に様々な芸術文化事業を展開してきた私達みらい創造財団にとって、これからの組織、事業の在り方という根本に関わる大きな課題と

さんのみなさまや子どもたちに伝え、文化を「継承」することにも力を尽くしていただいております。東京二〇二〇オリンピック、

考えています。市歌にも歌われる藤沢市が持つ観光や産業といった様々なまちの顔の代表格とも言うべき文化都市の顔をどう継承、発展させていくのか、財団の芸術文化に対する未来思考が今こそ必要だと思っています。

そして三〇年前、この市民会館の隣に藤沢青少年会館がありました。図書館や市民会館などの文化施設と一体的に配置され、これらの施設を青少年から熟年者まで多くの市民が様々な形の居場所として利用していたことなどを考えますと、周辺地区再編整備におけるこうした機能の複合的配置も未来の市民文化の創造、発信にとって新たな効果を生み出す要素となるのではないかと考えます。

市民会館周辺再編整備における青少年、芸術文化、そしてスポーツと私たち財団が担う三つのカテゴリーに対する未来創造の夢は大きく広がっております。

パラリンピック競技大会に向けて、ますます藤沢の伝統文化が広がってまいりますことを願っております。

第39回芸術文化展

文化団体連合会の壁面部門である美術家協会、書道協会、写真協会、華道協会の会員による芸術文化展が、十月十六日から二十一日まで藤沢市民ギャラリーで開催されました。

表現方法の異なる四団体が一堂に会する会場は十月に入っても真夏日の外気に負けないほどの熱い気迫に包まれていました。何をどのように伝えたいか！課題を選び、背景にあるもの思いを巡らせ、どのように表現するか思い悩み、試行錯誤を繰り返しながら作り上げた作品が並んでいます。

思いを伝えることは出来たのでしょうか？

来場すると、まっしぐらにお目当ての作品に向かう人、一品ずつじっくり丁寧にみている人、ひと通り見てからお気に入り作品に戻って、ゆったりと楽しんでる人など鑑賞の仕方は様々でしたが、そこには作った人と見る人との間に確かな交流があったと思います。そして、心に響く作品に出会うことがで

きたのであれば嬉しく思います。

最終日には、恒例となりましたギャラリートーク・アーティストトークが行われました。ここでは制作過程の説明や作品への思いなどの話があり、見学者からは「作品を見る角度が広がった。」「いろいろな分野の話が聴けて楽しかった！」などの声がありました。

じっくりと培われてきた伝統文化芸術が、次の世代にも身近な生活の中にあるように願っています。



(間瀬游泉 記)

第三十二回

藤沢市伝統芸能発表会

十二月九日(日)藤沢市民会館にて十時より、開催されました。好天に恵まれ多数の方にご来場頂きました。

十時に開会のことばで始まり、謡曲協会の「憧れ」「乱輪舌」「葛城」の後、式典に入り、主催者の石井藤沢市みらい・創造財団理事長・長田藤沢市文団連会長の挨拶、ご来賓の鈴木市長・松下市議会議長の祝辞を賜り、平岩教育長・秋山生涯学習部長のご紹介。文団連の各団体代表者の紹介で式典終了。

続いて邦楽協会の琵琶「西郷隆盛」に移りその後、吟詠連盟の「失題」他、七曲を吟詠し、民謡民舞の踊り・三味線合奏・合唱の後、日本舞踊協会の清元・長唄・常磐津による舞踊があり、謡曲「俊寛」に引続き、邦楽協会の端唄四曲演奏の後、吟詠連盟の吟詠「城山」他七曲を吟詠し、三曲協会の「鹿野苑恋慕」他一曲演奏。最後に民謡民舞連合会の合唱・踊り・三味線等を演奏し、フィナーレは民謡民舞連合会の踊り「遊行ばやし」を

会場の皆様と一緒に踊り、賑やかに締めくくりました。

また、第二展示集会ホールに於いては、茶道協会による「呈茶席」が設けられ、多数の方々がご利用され大変好評でした。多数のご来場に感謝申し上げます。すとともに、伝統芸能に興味を持つて頂き、親しんで頂き日本の伝統芸能を引き継いで頂くことを切望致します。



(森中志水 記)

第30回文化講演会 愛と優しさで人は育つ

講師 永山友美子氏

十一月十一日



日、藤沢市文化団体連合会が主催する文化講演会が市民会館小ホールに於いて開催されました。

講師に永山友美子先生、テーマは「愛と優しさで人は育つ」、身近かでは接することの少ない楽器、アイリッシュハーブを奏でながらのお話でした。

日常生活の中で愛はどのように育つか、生活環境、自然環境、その中でも対人関係になりますと非常に難しく様々な問題が心に影響を及ぼすと愛情溢れるお話しに会場内は笑いが広がり、時には何故か涙が頬を伝わって来ました。赤とんぼ、夕焼け小やけの童謡が演奏されるとどこからか歌声が聴こえてきました。「愛は言葉で伝える、お互いを思う優しさは心を育てる、そしてスキンシップを大切に」そんな言葉を呟きながら会場を後にしました。

(加藤径石 記)

第六十八回 藤沢市展

今年度の第六十八回「藤沢市展」が二〇一八年六月五日から六月二十四日まで十八日間にわたり藤沢市民ギャラリーにおいて開催されました。

六月五日から六月十日が写真・華道展、六月十二日から六月十七日が美術展、六月十九日から六月二十四日まで書道展が行われました。

展示数は美術（絵画・刻壺・工芸）二〇一点・書道二四四点・写真二六二点・華道八四四点、総合で六六二点で前年をやや上回る作品が展示されたが、部門によつては前年より出品点数が減少している。今後、公募点数を増加することが課題である。

最終日の六月二十四日には、市民会館で入賞作品の表彰式と祝賀パーティーが市長はじめ、

多数のご来賓の出席をいただき盛大に行われ、今年度の市展は終了しました。

また、期間中の来場者は六二二二名。年々減少傾向で市展が市民にとって魅力ある展覧会になるよう原因を探り改善して行く時期に来ています。市展来場者の意見等でも審査方法の疑問や展示作品のレベルに対して、厳しい意見も聞かれました。

二〇二〇年のオリンピック開催も近づいてきており、市民の文化に対しても見識が高くなつて来ているので、市民ギャラリー移転計画実施に伴い市民が期待を待てる市展に変貌できるように行政や関係団体が一致団結協力し、市民の芸術文化向上をめざして実施できるよう努力して行きます。
(八ッ橋博美 記)

第十四回

春の野点と邦楽のしらべ

昨年、文化団体連合会の一員となりました日本舞踊協会として「春の野点と邦楽のしらべ」への参加は初めてのことでした。それまでは全く存知あがないことでしたので、どんな会か想像がつかず、手さぐりでの参加でした。幸い三曲協会の御協力のおかげで、大越先生の演奏による箏曲「六段の調べ」や尺八も加えた「さくらさくら」を踊らせていただくことになり、生演奏での舞台を見て頂けるようになりました。

お庭には華道協会の生花が置かれ、華やかな雰囲気を出しています。茶道協会のお点前と共に、長唄・詩吟と次々に披露され一日はゆつくりと過ぎていきました。日本の春の楽しみをもっと多くの方に知っていただけるといいと思います。

小・中学校の頃に日本の伝統的な季節の迎え方やしきたり、楽しみを味わう機会があれば、少しづつでも伝統芸能や伝統文化を理解する下地が出来ていくと思います。子供の頃には西洋

文化や芸術を学ぶことが多かった時代は過ぎたのではないのでしょうか。今でなければ手遅れになりそうな技術や文化がたくさんあります。若い人達がそこに楽しみを見つけ下さるといいと思います。



撮影 深澤日吉

(花柳小喜代 記)

伝統文化体験プログラム

昨年の八月十五日〜二十日にさいか屋藤沢店の五階催場で、夏休みWakuWaku体験inさいか屋が実施されたのを皮切りに、九月十八日には江島神社でセーリングワールドカップの選手を対象に日本の伝統文化体験プログラムが新しく実施された。

さいか屋では、順番待ちの長蛇の列ができるほどの盛況さで参加した茶道・華道・邦楽・書道・民謡民舞・日本舞踊の方々は嬉しい悲鳴を上げていた。江の島でのセーリングの選手対象はヨットハーバーが休みということもあり、人数的には少なかったが、参加して頂いた外国の方々には大好評だった。当日はNHKが取材し三時の関東甲信越ニュースで放映された。また、朝日新聞も取材に来て、翌日の湘南版には大きな写真と共に記事が掲載された。

今年の三月三十日と三十一日には恒例のワクワク体験ひろばが開かれ大盛況だった。この大成功は関係各位のご協力の賜と心から感謝申し上げます。
(長田華鳳 記)



夏休み wakuwaku 体験 茶道



江島神社 書道



江島神社 華道

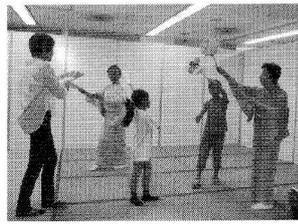
文団連活動だより

藤沢日本舞踊協会

昨年五月、日本舞踊協会は勉強発表会を開きました。時世の流れや経費の問題など、壁はありますが、会員一同気持を一つにしてお弟子さん達と共に、日頃の成果を発表しました。次の世代に伝えることは大切な事であり喜びでもありますが、現実には裾野の広がり、に苦しみ、高齢化に悩むのが現状です。

これは日本舞踊に限ったことではないと思いますが……。この発表会を控えながらの「ワクワク体験教室」「春の野点」は、どちらも初めての参加でしたので勝手がわからず大変でした。「ワクワク」では家族連れやお友達同志で数十人のお子さん達が来て下さり、日本舞踊はきつと誰も来てくれないと思っていた私達は驚いて、少しでも親しんで頂ければと、交代で声を枯らしました。ここでは日本舞踊の基礎

である拍子から手拍子足拍子を「むすんでひらいて」の唄で、その後簡単な踊りの稽古として「さくらさくら」を選び一緒に練習しました。そして夏のさいか屋での催物や十二月の伝統芸能発表会と、一年は飛ぶように過ぎてゆきました。伝統芸能発表会では若手の踊りとベテランの踊りで、初々しさと落ち着きの対



比の中、所作舞台が無いにもかかわらず、衣装・かつら・顔師とプロの方々に来て戴き、本格的なこしらえて臨みました。日本舞踊は歌詞に振りがついていきます。その内容をいかに体全体で表現することができかが踊りの命です。芸事は何でもそうですが、終りがありません。これからも研鑽をつみ、来年は又発表会を持ちたいと考えています。初めて文団連に所属することで、各協会の皆様も同じ悩み、同じ問題を抱えていらつしやる事が解りました。関係各位の御協力には心より感謝を申し上げます。(梅津壹寿 記)

藤沢市美術家協会

今回は、来年のオリンピックイヤーに結成七〇年を迎える藤沢市美術家協会の活動の歴史を紹介したいと思います。

一九五〇年、洋画家・塚本茂氏の呼びかけにより市在住の美術家たちが会派を超えて集い、藤沢市美術家協会が結成されました。

翌一九五一年『美術を通じての地域文化の振興と向上、会員相互の親睦を目的』として正式に藤沢市美術家協会が発足し、美術家協会の作品展が開催されるようになりました。

創立当時の著名な美術家には上田臥牛(日本画家)、織田観

潮(日本画家)、羽根万象(日本画家)、塚本茂(洋画家)、坂本幹男(洋画家)、金子保(洋画家)、小林重三(鳥類画家)、山岸主計(版画家)、菅沼五郎(彫刻家)、加藤顕清(彫刻家)、池田勇八(彫刻家)、各務鑛三(ガラス工芸家)、水野矯夫(彫金家)等がおりました。

第一回協会展を準備中の折、当時の伊沢市長をはじめとする協力者の方々により、美術家協会展を第一回藤沢市展として市民の方々に観ていただく運びとなりました。会場は落成したばかりの市庁舎の会議室でした。

藤沢市展は第六回から一般公募になり、書道・華道・写真の部も加わり、新しく出来た秩父

宮記念体育館での開催となり、全国でもまれに見る芸術の総合展として発展してきました。現在藤沢市展は、市展実行委員会が主催し運営しています。

美術家協会の会員は、藤沢市展を発表の場としつつ会員独自の展覧会を行ってきました。一九六〇年代までは、有志による小品展やチャリティー美術展が多数開かれました。一九六八年には名店ビルで、一九七五年からは十字屋百貨店(現・藤沢オーパ)で定期的に会員展が開催されるようになりました。その後、会場を市民ギャラリーに移し現在に至っています。

(川島 淳 記)

藤沢市謡曲協会

能の曲は四千曲以上作られたと言われているが、現在残っているのは二百数十曲である。

その中に『江野鳥』という曲があり、片瀬にある江ノ島を題材にしている。藤沢に縁があるので、紹介したい。

作者は十五から十六世紀に活躍した観世弥次郎長俊である。

あらすじは、欽明天皇十三年(五五二年)相模国江野の海上に島が湧き出て、弁才天が影向されたので、勅使(天皇の使い)が江野に赴く。

丁度その時、老漁夫が来て勅使の尋ねに答えて、この島が湧き出た時の様子を語り、この島の鎮守であ

る弁才天およびその夫である神、五頭龍王すなわち龍口明神のことを語り、自分がその五頭龍であると言つて消えうせる。やがて弁才天が十五童子を伴つて現れ、勅使に如意宝珠を授け、五頭龍王も出現し、国土の守護を誓つて天に昇つてゆく。文中に深沢と龍口の言葉が見られ、親しみを覚えます。

本年度の活動結果

- 定期勉強会
- 藤沢公民館「済美館」にて奇数月第二日曜日に発表会実施
- ワクワク体験ひろば
- 三月二十四日・二十五日藤沢市民会館にて実施
- 「鶴亀座」公演が好評だった
- 謡曲協会「春の別会」
- 五月十三日於・済美館
- 交流会の実施
- 六月十日鎌倉地区謡曲会と横浜能楽堂にて交流謡曲会実施
- 茅ヶ崎市謡曲大会
- 十月八日於・茅ヶ崎市民文化会館小ホール
- 藤沢公民館祭り
- 十月二十日於・済美館
- 藤沢市謡曲大会
- 十月二十八日於藤沢市民会館
- 隅田川謡曲大会
- 十月十日鶴亀座の誘いを受け江東区文化センターへ出演
- 藤沢市伝統芸能発表会
- 十二月九日於・藤沢市民会館

(原田和昌 記)

藤沢写真協会

藤沢写真協会は昭和二十六年(一九五二)藤沢市観光課の要請で発足し六十八年目を迎えるようとしております。当時はまだ写真機と言っていた時代、職業写真家(プロ)集団で構成していたと聞いております。

現在、当協会では市内在住のプロ写真家に月一度の講習をお願いし、各自写真を持ち寄り講師による講評を受けてのサークル活動を行っております。

三月に行われました、第五回「ワクワク体験ひろば」では、子供たちにカメラ撮影体験と、その場で撮った写真コンテスト、その作品の表彰、それぞれ思い出の残る体験を楽しく過ご

藤沢市茶道協会

藤沢市茶道協会の三十周年記念祝賀会が、平成三十年三月三日クリスタルホテルで開催され藤沢市長、文団連会長にご出席いただきご祝辞を賜りました。発足当時より表千家、裏千家、大日本茶道学会、宗徧流、煎茶道東阿部流の先生方が中心となって、流派を超えて相互の親睦を図り協力してまいりました。

現在茶道協会は、わかりやす

ごしたことを思います。

二〇一八年度、当協会の活動として「第六十八回藤沢市展」市民応募作品の搬入・搬出の手伝い、市展目録へ掲載の各部門別「五大賞作品」の写真撮影を担当しました。

九月十一日、十六日の六日間、市民ギャラリーにて当協会第四十四回「藤沢写真協会展」を開催しました。会員十八名中三十六作品の展示でした。入場者も八〇〇名を超え好評裡に終了しました。

十月には「文団連」恒例の第三十九回「芸術文化展」に参加、最終日ギャラリートークでは各団体の日頃の研鑽を示され、語られた事で、有意義な一時を過ごさせて頂きました。

協会の活動をめざして会員同志の交流を深めることはもちろんながら、茶の湯にふれたことのない市民の方々と、一服のお茶を通して心のふれあいを願っております。文団連事業の「ワクワク体験ひろば」も、子供達が茶筌を持って抹茶を点て、目を輝かせて茶道体験しております。

十月十四日には、第三十回記念茶会を遊行寺で、煎茶道東阿部流堀田雪千(卒寿)・裏千家小島宗喜(卒寿)・表千家田口

宗迪先生が茶席を持ちました。記念茶会にふさわしい心に残る茶席となりました。

十二月四日、十日までの約二週間、第二回「ふじさわ宿交流館写真展」を、



に、祭り・行事・名所・古跡など十八作品を展示させて頂きました。

今回のテーマで藤沢の各地をそれぞれの視点で観て撮影し、改めて藤沢の伝統ある歴史の深さを感じました。これを機に藤沢の変貌ぶりなど記録に残せればと認識した次第です。

(深澤日吉 記)

藤沢華道協会

藤沢華道協会の一年は、一月の「新年総会」から始まります。二月の「藤沢宿交流館への展示」は八作品、十二日には展示と体験三十人の方がいけばなを楽しみました。つづいて三月には市民会館にて「ワクワク体験ひろば」で

二三名の方々を迎え、男児・女兒親子づれでお花を楽しむ姿が見られました。「とても楽しみにしていました」との声も聞かれました。四月にはさいか屋の5階において、「神奈川県展」を盛大に実施。一万五千人を超える来場者を記録しました。五月は「市展」。六月は「親睦観劇会」。八月には「わくわく夏休み伝統文化体験」が実施され十四作品の

展示と三百二十五人の方に体験していただきました。体験は行列ができるほどの人気でした。

九月は江島神社にてセーリングワールドカップ参加者向け体験プロジェクトを計画実施。とくに外国人十七名の方の参加がよかったです。十月になると市民ギャラリーで「芸術文化展」「国際フェスティバル」においては三十名の方々に楽しんでいただきました。



このように二〇一八年はオリンピックを見すえて、市民の皆様日本の伝統文化である華道いけばなの体験する場を通年より多く企画いたしました。総数約七〇〇名の方々といけばなを楽しむことができました。

日本の伝統文化であるいけばなは、古来より花を愛で、花を生活に取り入れることで心を慰め、四季折々の自然の生命にふれることが生活の一部となっていた。生命のほかなさ、いとおしき、そして力強さを感じるとともにおもてなしの心を養ってきていました。

その和の心をいけばな体験やいけばなの作品を通して後世に伝え残していくことを使命と痛感し、活動をしてまいります。

(瀬尾理祥 記)



30周年記念祝賀会

(田口迪子 記)

藤沢市邦楽協会

藤沢市邦楽協会は、琵琶・端唄・長唄で構成しております。合同演奏会には、琵琶は「羽衣」「本能寺」「石童丸」「城山」「うさぎと亀」「敦盛」です。端唄は「なすとかぼちゃ」「さのさ節」「紀伊の国」「三味線合奏ひなぶり三番叟」「俗曲メドレー」そして長唄は、「松の緑」「娘道成寺」です。

琵琶は語りの中に楽器の美しく又迫力ある音色、端唄の楽しそうな歌詞と三味線の音色、長唄は老若男女の合同合奏曲でした。唄方・三味線方とわかれ演奏する形式ですが、古い伝統芸能でもジャンルの違いで色々変わる世界です。

十二月の伝統芸能発表会は、琵琶・端唄が参加。「春の野点

藤沢市民謡民舞連合会

藤沢市民謡民舞連合会の本年度の活動状況は、例年どおりの行事が行われました。

まずは、十二月には文化団体連合会の、第三十一回藤沢市伝統芸能発表大会に、富士峰連合会、芳美会、藤房会、秀長会、文央会、憲宏会、六会派が出演し唄・踊・合唱の舞台発表を行いました。

と邦楽のしらべ」には長唄「花の友」、端唄「七福神」、そして江島神社の献奏は今年三月と九月のワールドカップへのおもてなしがあり、選手団の方達への演奏は初めての体験で未知の形式にとまどいました。長唄への質問で、「指揮者がいないのに緩急や強弱どうなっているか疑問に感じる」がありました。それは、「たて三味線の掛け声です」と、アメリカの男性にお答えしました。良く気がついて下さり感心した、うれしい一場面でした。

時節がら暑い中の演奏は大変でした。その模様がNHKのニュースで放映され、又びつくりしました。終ったあと若い人達がスマホで一斉にひらいて見ている現代の姿に驚き、又良い思い出でした。ワクワク体験も春と夏にあり、沢山の参加がありました。

八月には、第三十八回民謡コンクールが小ホールで行われ、優勝・準優勝・入賞等の発表がありました。優勝者は二月に行われる民謡民舞研究発表大会に、唄声が披露される予定です。十二月に第二十七回民舞発表大会が小ホールで行われ、曲に合わせて出演者が工夫を凝らした衣装や髪飾り扇子等の持物も、見所がありました。

一月には新年会があり、各会

です。でも体力の限界があり、ますのでやり方を研究しなくてはと思います。大事な楽器を使っていたが、少々はらはらしております。外国の研修生のうれしそうな笑顔は今でも忘れられません。日本の楽器にふれ、音が出て曲を聞いてもらう機会は良いと思います。日本の方達にももっと体験してほしいと思います。そして演奏を聞いていただくのも大切な時と思っております。(稀音家六四次 記)



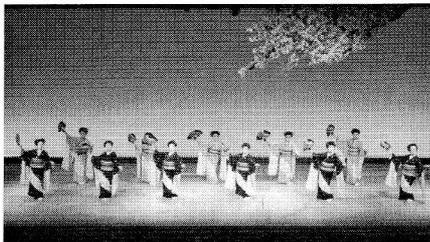
藤沢市吟詠連盟

現代詩吟のルーツは、江戸時代後期に武家の子弟を教育した私塾や藩校において、漢詩を素読する時に独特の節を付けて読んだ事に求められ、長く口伝され続けてきた。次第に漢詩の解釈の違いにより節回しや吟風も変化して幾つもの流派が誕生した。吉田松陰の妹婿で幕末の志士久坂玄瑞は、名吟家と知られていて京の芸者衆にも人気があったと言われていたが、蛤御門の変で負傷し自刃、俊才の死で維新も数年遅れたとも言われる。久坂玄瑞の吟と同じ流れをくむ人の詩吟のテープを聞いた事があるが、現代詩吟とは吟風や節調が全く異なっていた。現在のお経や御詠歌等は私達にはみんな同じ様に聞こえるが各宗派のお経や御詠歌にも經典の違いにより各宗派独特

の節が付けられていると云う。中国の記録に現れる朗詠は司馬遷「史記」の刺客列伝に「易水去りて」では紀元前二三七年に秦の始皇帝の暗殺に赴く荆軻が易水で友人達との死出の別離を思い起こして事件後の八五〇数年を経て易水を訪れた初唐の詩人四傑の一人義侠の人、駱賓王が荆軻を哀れみ詠んだ詩であるが驚愕する事に二千数百年も前に商声、宮声、角声、徵声(悲愁哀切)羽声(激した声調)と五種類の声調と二つの変調があると云う。荆軻が別れに悲しくも哀愁に満ち詠んだ「風蕭々」として易水寒し、壮士ひと度去つて復還らず」と吟じた詩は友人達の心に響き二度と還れぬ涙の別れに今でも多くの人に感動を与えている。秦は、この後十数年後に側近の宦官の裏切りで滅亡し項羽と劉邦の時代に移ることになる。

又、次回も是非会場においでいただき、ご声援をお願いします。

又、子供コーナーでは、可愛い子供達の踊りと唄と三味線があります。



淡墨桜 湘南八寿花会

(青柳登喜男 記)

「垓下の歌」項羽、「鳥江亭に題す」杜牧、「虞姬」呉永和、「虞美人草」曾鞏、「台風の歌」漢の高祖など漢詩も歴史と共に歩む。真剣だと知恵が出て中途半端だと愚痴がでる、いい加減だとミスがでる。いかに上手でも心が籠っていないければ感心はするが感動はしない。成功、不成功問わず初心者時の体験を忘れては上達が妨げられると云う。「稽古とは一より習い十を知り十より返るもとのその二

」

又、子供コーナーでは、可愛い子供達の踊りと唄と三味線があります。

(坂野岳曉 記)

藤沢市書道協会

藤沢市書道協会は、長年経験のあつた書道の先生方が集まり、造られました。以後は、藤沢市展の受賞者が推薦され、会員となります。

本年度は、高井翠陽会長を筆頭に、新会員一〇名が加わり、一三〇名の会員で運営されています。毎年の行事は「藤沢市展」「学生展」「芸術文化展」「藤沢書道展」ですが、新しく文団連からのオリニピック関連の行事が入りました。

また、会員相互の親睦の為に、研修会、旅行会や、藤沢市のゴ

藤沢三曲協会

ワクワク体験ひろばについて報告する。昨年三月は、箏三面。尺八十本を用意した。楽器を教える先生は、当協会「箏グループ」から初日一人、二日目四人。「尺八グループ」から初日十人、二日目九人が参加した。一日対応のイベントのため、交代要員まで含め最低この程度の体制が必要であった。なお、当協会の会員数は四十二名。ワクワクは当協会の活動で定期演奏会に次いで参加者が多い。

教室は一回四十分程度で繰返す計画であった。しかし体験

ミゼロクリーンのキャンペーンに参加したり、教育委員会から依頼の市内の小・中学校への書道授業への支援も行っています。そして、この様な行事の報告も含め、会員へ書道協会独自の機関紙(第二回)を発行しています。

会員は、毎年三月に開催される「藤沢書道展」に全力を注ぎ、研鑽を積んでおりますので、市民ギャラリーの会場に毎年力作が並びます。ご高覧ください。近年、中・高校生に依るパフォーマンス入りの「大字」作品が放映されます。若し人達が書道に関心を持って取り組んで



(浅野玄圃 記)

いる姿がうれしく、長く続けてほしいと願っております。

者は「面白そうだ、私もやりたい」という人。「子供がやりたいと言ったので」という親子のケースが多かった。体験者は不連続に来て、その対応時間もばらばらだ。その結果、計画した教室の実施は難しく体験者毎に個別の対応をした。親子の場合には、親御さんにも体験を勧めた。親御さんの方が熱心になる場合が多かった。

体験者の人数を見ると子供と大人は同数ぐらい。男性と女性も同数ぐらい。

尺八は、短管の方が音を出し易く一尺六寸管を用意した。その体験内容は(1)音を出す。(2)ドレ



ミファを吹く。(3)課題曲にトライとなる。体験曲は箏尺八共通で夕焼け小焼けを使った。(3)が出来ると箏との合奏に挑戦だ。ここまで進む人は三十人に一人ぐらいいたかと思う。(川添遊山 記)

新年賀詞交歓会

好天に恵まれた一月十九日、市民会館「まつの間」に於いて藤沢市文化団体連合会新年賀詞交歓会が開催された。

本年は民謡民舞連合会の山田鈴野氏による新年の祝曲「鶴亀」の舞によって開会となった。御公務の都合で鈴木市長、平岩教育長は遅れてのご来席となったが、松江市議会議長、石井みらい創造財団理事長、秋山生涯学習部長、横田文化芸術課長をご来賓に迎えた。

各ご来賓からご祝辞を頂戴した後、唐木文団連顧問の乾杯発声によって第一部は歓談の時間に入った。

午後二時過ぎ、第二部として最初に文団連を構成する各協会からそれぞれ活動報告が発表された。

次は恒例のカラオケ大会となり、懐かしい昭和歌謡曲が次々と披露された。

一同和気藹々とした中で定刻の三時半となり、森中文団連副会長の中締めを持って本年度の新年賀詞交歓



(中谷哲夫 記)

平成三十年度 藤沢市文化団体連合会役員

- 顧問 唐木信允(美協)
- 顧問 宇佐美美泉(書道)
- 会長 長田華鳳(華道)
- 副会長 森中志水(邦楽)
- 副会長 田口迪子(茶道)
- 事務局長 間瀬游泉(書道)
- 会 計 中谷哲夫(謡曲)
- 監 事 田代みつ子(民謡)
- 監 事 久松如陽(三曲)
- 常任理事 奈良喜吉(写真)
- 常任理事 安部契巨(吟詠)
- 常任理事 八ッ橋博美(美協)
- 常任理事 花柳小喜代(日舞)
- 理事 加藤径石(書道)
- 理事 稀音家六四次(邦楽)
- 理事 山橋一洋(写真)
- 理事 川添遊山(三曲)
- 理事 青柳登喜男(民謡)
- 理事 木村明光(華道)
- 理事 濱田道子(茶道)
- 理事 黒田節子(謡曲)
- 理事 西川光栄(日舞)
- 理事 坂野岳曉(吟詠)
- 理事 鈴木ケイ子(美協)

編集後記

江の島がセーリング競技会場になりましたので、文団連はこの機会に外国の方に日本文化の紹介に力を注ぎたいと考えています。(田口迪子 記)

題字 林 如巖
印刷 神奈川印刷株式会社